





手で書くんじゃない心が動いて書くんだよ 絵手紙／小池邦夫

これからも  
手がき文化を  
伝えて

おかげさまで日本絵手紙協会は昨年、創立40周年——さらに

10年、20年その先の100年へと皆さまと一緒に歩んでまいります。



特集

# 文房四宝って

## なんだろう

小池邦夫が夢にまで見て、追い求めていた墨色  
それはいったいどんな色だったのでしょうか。

昨年8月号の「目習ってなんだろう」に次ぐ、

40周年記念特別号Ⅱ「文房四宝ってなんだろう」。

小池邦夫は「宝は自分の中にある」といいました。

ひとり一人追いかけるものは違います。

あなたも自分だけの宝ものを探してみませんか。

憧れ・トキメキ・等身大



赤水珠 程君房造  
仕服入り径7cm、厚2cm  
\*サイズは分かるもののみ記載  
中川一政旧蔵の中国・明時代の墨(明墨)



アトリエで硯について語る小池邦夫。大きい硯は三足日月宋代歙州硯。丘を日、海を月に見立てている。もう一つは端溪老坑水巖大西洞硯



早坂睦子(宮城)  
筆で線の練習をするのも無心、墨を磨るのも無心!  
この硯は中国のもの、日本製では雄勝硯を使っています。



川上晴美(熊本)  
広島熊野へ筆を求めて行き、材質や作り方を拝見させていただきました。工程を見て、大切に使用しなければと実感しました。

読者投稿

トキメキ!

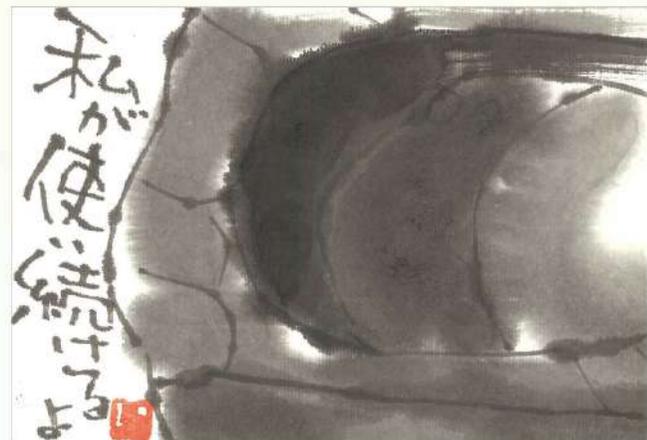
# 私の 愛しの相棒 文房四宝



絵手紙に欠かせない筆墨硯紙。  
いずれも手間ひまをかけて作られた道具です。筆は動物の毛、紙は植物の一部をいただいたもの。そこにかき手の思いが重なり、一通の絵手紙となってあの人のもとへ。  
近頃では郵便は「ゆっくりと待つもの」になりました。その時間がかえって心にゆとりを生み、お互いにこれまで以上に贅沢な時間を共有できるのではないのでしょうか。  
文房四宝というモノトーンの世界にあるトキメキを、皆さんの絵手紙から見せてもらいたいです。



税所千恵子(茨城)



小西伊津子(三重)  
父が使い、母が使い、そして私の手元へ。この硯に見合った自分になりたいと話しかける。

# 筆墨硯紙のツボ



大切に使えば応えてくれる文房四宝。その取り扱いについては、文房四宝研究家の濱田薫さんにご指南いただきます。

筆墨硯紙、昔から使われてきた文房具だけれど、ボールペンや鉛筆など西洋の文具に比べると、なかなか取っつきにくい。いざ使おうとしても、水が必要だったり、墨を磨ったりと、ひと手間かかる上に、やっとの思いで書く段になっても、西洋文具の硬いものに慣れた手は、力み過ぎてまとも

に動きやしない。そんな難儀な筆墨硯紙なのだけれど、その取っつきにくさや、わずらわしさや、乗り越えて使い続けるしてみると、他の文具に無い豊かな表現力があって、いつの間にか心ワクワク楽しく

なってくるのだから不思議だ。そんな不思議な筆墨硯紙をより楽しむために、手入れの仕方やら使い方のコツやらその他もろもろのことを、要

点だけかいつまんでわかりやすくまとめられたら——なんてことを考えていたら、この企画になりました。題して「筆墨硯紙のツボ」！

ツボ庄しマッサージは、身体に効くばかりでなく痛気持ち好い、そんな感じに書き上げれば幸いなことこの上なのですが、何せこの書き手、性格がひん曲がっている故か、話が方々へ脱線することしばしば、ひよっとすると何が入っているか分らないごった焼きの壺のようなやも知れぬ。まあ、こちらのツボになったとしても、味さえ好ければまるく収まる、たぶん「苦笑」と、いうことで、いざご賞味ください。

## 硯

人呼んで「文房四宝の王者」

ツボ1



墨汁や筆ペンが普及した今日、文房四宝の中でも肩身の狭い硯。でも、本来は四宝の王者と呼ばれ、真ん中にでんつとふんぞり返る存在。それだけ重要な役割を担っているわけですね。

墨汁や筆ペンは、インクのようなものを使っているので、そもそもが単調な色合いしか出ない。それと比べて、硯を使って墨を磨り出れる上がる墨液は、濃淡幅広く現れてなんとも表現力豊か。そして、その豊かな表現力を生み出すのは、墨そのもの以上に、実は硯が担っている。

ツボ2



### 硯の命、それは鋒錠

硯に必要な条件は二つ。一つは水が浸み込まない石であること。水が浸み込むと、磨ったそばから墨液が吸い込まれて消えてしまう。そして、もう一つが墨を磨り下ろすために、硯の表面に適度なギザギザがあること。鋒錠と呼ばれるこのギザギザ、おろし金のように目に見えるものではないけれど、これがないと墨が滑って一向に墨液が出来上がらない。

## 硯の名称

鋒錠は緻密なほうが良いけれど均一過ぎると目詰まりする。適度にまばらじゃないとダメ。故に人工的には作りにくい。

墨堂  
丘ともいう

退錠のイメージ図  
先のギザギザが丸くなる

墨池  
海ともいう

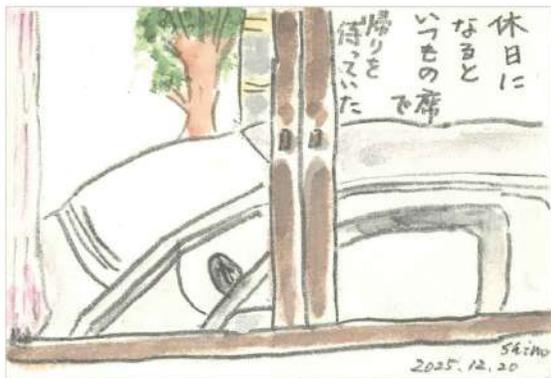
- ◎墨池がなく、墨堂だけの硯もある。
- ◎使い込んで鋒錠が削られていくことを「退錠」という。



木村スミ子(福島)  
毎年冬になるとエサを食べにきます。リビングの窓から眺めて癒されています。



菟木恵子(大阪)  
ベランダの花たちに癒され元気をもらっています。



福原志乃(鳥取)  
母は居間の窓から四季を感じ、登校の学生の声を聞き、休日になると家の前に私たちの車が停まるのを楽しみにしていたのだろう。



小川道子(74歳・広島)  
スーパームーンの話で盛り上がった友と、窓から見える月でもつながる思い。

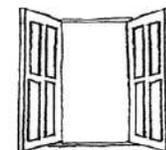
読者投稿

かいて、送って、みんなでおしゃべり

# ひろば

テーマ「我が家の窓より」

窓越しのいつもの光景が、あなたの言葉で素敵な1枚に



・自由絵手紙 ・なんでも100字 ・活動報告



山田みさよ(新潟)  
午後3時を過ぎた頃になると熊鈴の音が、そろそろ夕ご飯の支度をしなくっちゃ!



小西伊津子(三重)  
毎日早朝、裏のうどん工場から元気な白い湯気がたち上がる。これを見て私も動き出す。



動物備をかいて 16.8×34.0cm

墨っていいな 最高の気分になれる 邦夫

初心から学ぶ『ヘタでいい ヘタがいい』

誌上レッスン

# 絵手紙教室

月刊誌を使って好きな時に好きな場所で学んでいきましょう

こいけ・くにお

絵手紙の創始者。1941年(昭和16)愛媛県松山市生まれ。19歳より絵手紙をかき始め、「ヘタでいいヘタがいい」をモットーに絵手紙文化を広める。その活動が評価され、東京都狛江市初の名誉市民に選ばれるほか、文化庁長官表彰など受賞も多数。2023年8月31日82歳で永眠。